

脊椎癌全摘術の開発：論文に書けない本音と裏話

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9314

脊椎癌全摘術の開発

— 論文に書けない本音と裏話 —

Establishment of original surgery, "Total en bloc spondylectomy"

— Some episodes behind the scientific papers —

金沢大学医学部整形外科

富 田 勝 郎

私は「脊椎癌全摘術」をライフワークの1つとし、教員と共に研究を進め、これまでに幾多の論文を発表してきました。その論文を読み講演を聴き、危険に満ちた“トリッキー”な手術を一度見たいと国内外からも手術見学に来られるようになりました。そして必ず聞かれる質問は「どうしてこんな危険な手術をやろうと決心したのですか？その勇気と情熱はどこから？」。その答えは決まって「癌を全摘する事のみが一縷の希望につながる、と考えたからです」と、できるだけゆっくと謙虚に、牧師のようなヒューマンイズムに満ちたまなざしで答えることにしています。繰り返し答えているうちに本当にそんな気持ちだったような気になるから不思議なものです。しかし本当にヒューマンイズム精神が私を動かしたのかどうか霞の中なのです。

私の前の教授（高瀬、野村）の頃は「脊椎癌患者の場合は、手術する価値の無いこと、余命幾ばくも無い旨を家族に告げ、ホスピス対策を行うように」という指導でした。脊椎癌にメスを加えると大出血と癌細胞の撒布により死期を早める、即ち手術は殆ど禁忌に近いものでした。

助教授の時、この「禁断の実」をうまく取ればちょっとした手術革命になると「直感」した私は、野村教授に「脊椎癌に対して根治切除術を試みていいでしょうか」と伺いました。即座に教授は「まてまて、そんな危険なことはやめとけ！今の世の中、何でもうまくいって当たり前、一歩間違えと針刺し医療ミスどころか医者が刺されかねない。教授選挙を控えてる君の命運も危ない」と諭されました。勿論、恩師の思いやりから出た言葉でした。

ところが平成元年、教授になった瞬間に運良く「胸椎の骨肉腫」の女子が私の目の前に現れました。そのときの獲物を射るような私の目の輝きと「解禁！」の天の声。私はかねて心の中で練っていた術式を試みることが許されると直感しました。密かに解剖学教室に足を運び献体で模擬手術練習を行い、理論的には安全に可能であると自分に言い聞かせて手術に向かいました。術当日、助手にはそんな企ての事は知らせず（ここが、私にもわからない人間心理のさらに複雑なところ）背部から脊椎を露出した後（普通ならこれで手術終わりなのですが）、さらに後ろから脊椎癌周囲と大動脈静脈、肺の間を指で剥離し始めました。この常軌を逸した危険な手術操作に助手が、「先生、な、なんてことをするのですか。やめ

て下さいよ！」と叫びました。「まあまあ、ちょっとだけなら良いやろ。ほんの1mm剥がすだけや」と言いながら逃げ腰のままこわごわ椎体の周囲を1mm剥がして安全を確かめ、また1mm剥がして大息を付き、また1mm・・・と、これを繰り返しているうちに夜が明け朝を迎え、ついに脊椎の全周を剥がし終えました。脊椎の骨肉腫病巣を初めて「ひとかたまり」として取り出し得たときはもう興奮の極みで、摘出した癌の塊を握ってワナワナ、しばらくは手術がストップしてしまいました（この患者、10年経ったいま麻痺もなく元気でそろそろ結婚適齢期です）。

症例を積んで5年後、国際誌に投稿し「ナンセンスで危険な手術・Reject！」とされたものを全米整形外科学会で発表したところ、会場内がため息やらざわめきやらに包まれ、発表が終わると同時にこれまでにないような大きな拍手とstanding ovationをうけ「日の丸特攻隊」精神を思い起こさせたような興奮に包まれました。

あれから10年、今でも講演でよく出る質問に「なぜ、全周剥離が可能と確信したのですか」。答えは「解剖のおかげです」。が、心の中の答えは少し違うのです。こう付け加えたいのです。{|20年前留学していた時に、中古の車でアメリカ横断してみたいと言ったところ、当時のボスが「そんな無茶なことをするな。アメリカは事故も犯罪も世界で一番危険なんだ」「いや、ここから1kmだけ走ってみたい。危険ならすぐ引き返します。安全ならさらに1km行ってもいいでしょう・・・。」結局、アメリカを往復横断して無事(?)帰ってきました。これと同じく手術をいつ中止してもいいように逃げ腰の姿勢でこわごわ剥離し続けてみただけですよ」と。{|

「青年よ大志を抱け」は有名な格言ですが、私みたいな者に初めから大きな野望を持つのは似合いません。その大きさに恐れをなして尻込みするに決まっています。しかしだれにも「直感的にやってみたい衝動」に突き上げられることがあるはず。そこに理論が裏付けされれば、逃げ腰の姿勢でやるのも“また人生楽しからずや”ではないでしょうか。自分の経験と目の前の事実を信じて一歩一歩慎重に歩いていく「雨垂れ石を穿つ」ような人生もあっていいような気がしています。

この「脊椎癌全摘術」関連の博士論文、この十全医学会誌にも多く載せていただき、ありがとうございました。その裏にはこんな背景もあったのです。これからもよろしく御願います。